

第二次審査（論文公開審査）結果の要旨

Dietary habits in adult Japanese patients with atopic dermatitis

日本人成人アトピー性皮膚炎患者の食習慣

日本医科大学大学院医学研究科 皮膚粘膜病態学分野
研究生 伊藤 路子

The Journal of Dermatology, volume 46, number 6, 2019 掲載

DOI: 10.1111/1346-8138.14

アトピー性皮膚炎（Atopic dermatitis: AD）はアレルギー反応、皮膚バリア機能障害、瘙痒を特徴とする慢性炎症性皮膚疾患である。AD の発症には種々の環境要因が関与し、その一つに食習慣がある。欧米の AD 患者は対照者と比べて n-3 多価不飽和脂肪酸の摂取量が低く、飽和脂肪酸の摂取量が高いとされるが、日本人 AD 患者の食習慣はほとんど研究されていない。Brief-type self-administered diet history questionnaire（BDHQ）は、日本食に基づく食習慣に関する質問項目で構成される。そこで、申請者らは BDHQ により日本人成人 AD 患者群の食習慣を調査し、対照群と比較した。

日本医科大学千葉北総病院と付属病院皮膚科外来を受診中の成人 AD 患者 70 名（男性 43 名、女性 27 名）を対象とした。対照群は、患者と年齢、性別をマッチさせた 70 名の健常者とした。AD の重症度は severity scoring of atopic dermatitis（SCORAD）で評価した。BDHQ 質問票の回答結果から 1 日の摂取カロリー、各種栄養素・食品摂取量を算出した。AD 患者群は重症群（SCORAD \geq 33, n = 35）と軽症群（SCORAD $<$ 33, n = 35）に分類した。栄養素・食品摂取量と AD との関連には、年齢、性別、body mass index（BMI）で補正した多重ロジスティック回帰分析を用いた。SCORAD の予測因子には年齢、性別、BMI で補正した線形回帰分析を用いた。

AD 患者群では対照群と比べて炭水化物、芋の摂取量が多く、アルコール、ナイアシン、肉、油脂の摂取量が少なかった。多重ロジスティック回帰分析の結果、AD とアルコール摂取量の負の関連性が検出された。ビタミン B6、果物の摂取量は SCORAD と正の相関を示した。線形回帰分析の結果、ビタミン B6 の摂取量は SCORAD の予測因子と判定された。重症群の植物性脂質、n-6 多価不飽和脂肪酸、菓子の摂取量は、軽症群より少なかった。

AD 患者は痒みを増強する可能性のあるアルコール摂取を避けている可能性が示唆された。ナイアシンの代謝物であるニコチン酸アミドは経表皮的水分喪失量を減少させ、バリア機能を保持する。AD 患者群におけるナイアシンの摂取量減少は、皮膚バリア障害と関連

している可能性がある。n-6 多価不飽和脂肪酸であるリノール酸の摂取は、AD モデルマウスの皮膚バリア障害と痒痒を軽減させる。重症 AD 群における n-6 多価不飽和脂肪酸摂取量の減少は、皮膚バリア機能障害や痒痒の重症化に関連する可能性がある。

第二次審査では、①香辛料の摂取と AD との関連、②肥満と AD との関連、③AD の発症や重症化の予防のための食事指導、④今後の研究の発展性、などに関して質疑がなされ、それぞれに対して的確な回答が得られ、本研究に関する知識を十分に有していることが示された。

本研究は BDHQ を用いて日本人成人 AD 患者の食習慣を詳細に検討した初めての報告であり、その臨床的意義は高いと考えられた。以上より本論文は学位論文として価値あるものと認定した。